地域のために 人間学部

4月からスタートした人間学部。1期生として35人を迎え入れ、人間と文化の関係を学び、まちづくりに貢献する人材を育てる「人間文化学科」と教育や福祉の分野で活躍する人材を育てる「人間教育学科」の2学科で、最新の施設・設備を生かした講義が展開されている。

入学から2カ月がたち、1期生の2人に学部の印象や4年間の目標などを聞いた。

入学の動機について「英語が好きで、語学について勉強したかった」と話す里愛さん（人間文化学科・石巻北高＝号）と、「保育士になるため、四年制大学でしっかりと学びたかった」と語る佐藤碧さん（人間教育学科・石巻西高＝同）。

「私たち人間学部の未来を作っていくので、プレッシャーを感じています」と佐藤さん。学部の苦手なことも締めず、楽しみながら取り組んでいきたい。一つひとつの講義をしっかりとこなし、自分が本当にやりたいことを見つけたい。

また講義について中里さんは「心理学など初めて学ぶことが多く、楽しい講義が多い」。佐藤さんは「音楽が好きなので義に過ごしたいです」と意気込みを語った。

ピアノの授業や施設が充

充実の施設 楽しく学ぶ

人間学部は多様な実習を通し、文化と教育を学ぶ。5号館に充実した設備・機能を持つ実習室が設置された。

心理行動観察室　幼児との遊びを体験する「プレイルーム」、その様子を観察する「準備室」、箱庭療法の実習などに活用される「相談室・検査室」があり、心理学の理解を深めることができる。

ピアノ室　音楽教育のため、33台の電子ピアノが並ぶ音楽全体練習室と、個人レッスンができる個室タイプを完備。4年間、ピアノ実技が学べるようにカリキュラムが用意されている。

調理実習室　IHクッキングヒーターやオーブンなどを備えた実習室。各テーブルの上には大型モニターが設置されており、DVDなどを視聴しながら実習ができる。

図画工作室　図画・工作・手芸など、図画工作全般についての実習が行われる。学生たちは実習を通して理論を学び、指導方法を体験する。

いしのまきワンセグ

学内のスタジオから毎週生放送している本学のコミュニティーテレビ局「いしのまきワンセグ」が、大学のPRに一役買おうと準備している。8月から始まるオープンキャンパスで、来場する高校生や保護者に本学の魅力や特徴を伝える番組を見てもらおうと企画を練る。

「いしのまきワンセグ」はエリア限定でワンセグ放送を行う東北初の教育機関の地上一般放送局として、昨年8月に開局した。キャンパス内で視聴できる微弱な放送波を使い、映像や音声を配信する。携帯電話（一部のスマートフォンを除く）やゲーム機、カーナビで視聴でき、提携するラジオ石巻（コミュニティFM）でも音声を聞くことができる。

運営するのは経営学部の湊信吾教授、益満環准教授、舛井道晴准教授のゼミナールの学生7人。代表の阿部善和さん（経営3・福島県福島東高）は「ワンセグ放送をやっているといっても、多くの人に見てもらわないと意味がない。開局2年目となる今年は何とか認知度を上げたい」と意欲を燃やす。

現在は毎週金曜13時5分から30分

▶キャンバスで生放送中の学生たち

大学の魅力を発信

学内のスタジオから毎週生放送している本学のコミュニティーテレビ局「いしのまきワンセグ」が、大学のPRに一役買おうと準備している。8月から始まるオープンキャンパスで、来場する高校生や保護者に本学の魅力や特徴を伝える番組を見てもらおうと企画を練る。

「いしのまきワンセグ」はエリア限定でワンセグ放送を行う東北初の教育機関の地上一般放送局として、昨年8月に開局した。キャンパス内で視聴できる微弱な放送波を使い、映像や音声を配信する。携帯電話（一部のスマートフォンを除く）やゲーム機、カーナビで視聴でき、提携するラジオ石巻（コミュニティFM）でも音声を聞くことができる。

現在は毎週金曜13時5分から30分間、ラジオ石巻の技術協力を得て生放送のトーク番組「キャンパスライブ」を制作しているが、収録VTRを作ろうにも人手が足りない。番組スタートから半年たち、オン・エア中の現仙台城南高、「企画づくりはいろいろな活動に応用が利く」（若山未来さん＝同石巻北高）。JR仙石線の全線開通が遅れ、大学発の帰宅バスは18時30分が最終便。アルバイトをしている学生は活動にくい事情はあるが、興味があれば学部や性別を問わず大歓迎という。

年次生の新規加入にはいたる実に視聴でき、地域に密着した情報を届けられる強みがある。大学の話題のほか、まちの情報を増やしながらネットワークを広げ、いざというとき頼りになる存在を目指す。

通信回線を使わないワンセグ放送は、災害時でも確っていない。

「放送の裏方の仕事ができて勉強になる」（千葉臣さん＝以下いずれも経営3・宮城県石巻商業高）、「自分たちが発信する達成感は大きい」（四釜雄介さん＝同東北工業大高・

理工学部食環境学科 玉置仁研究室

4月から新たにスタートした理工学部食環境学科と生物科学科の2研究室を訪問した。海、山、川……。キャンパスを囲む自然の姿が研究の対象になっている。

実習で「自然の回復力」の〝すごさ〟を実感

干潟や藻場など海辺の自然の保全・再生が専門の玉置仁准教授（生態工学、環境工学）は、毎年5月から7月にかけて1年次生の食環境学実習を担当する。今年も学生27人を連れ、大学から車で30分ほどの万石浦大浜地区で実習を行った。

太平洋に突き出た牡鹿半島の付け根にある万石浦は、東日本大震災で地盤が約80㌢沈下。干潟から浅瀬に姿を変えた。実習も胴長靴着用と様変わり。学生は手で泥をすくい、感触や色合い、においを記録する。

一時は激減したアサリが、稚貝の加入により震災7カ月後には増加に転じ

▲ 浅瀬の泥をおこす

ていることを玉置准教授は調査で明らかにした。しかし、事は単純ではない。その後どこからか粒子の細かい泥が流れ込むようになり、アサリの生育環境は脅かされつつある。干潟に戻す底上げ対象区域から外れたこともあり、玉置研究室では泥を少なくする方法の研究を始めた。

2時間の実習では、その一環として底土に空気を入れ、腐敗物質の分解を促すほか、粒子の微細な泥が巻き上げられ流出する物理的な効果もある。終了間際に底土をすくうとザラザラした砂の粒が多く残り、違いは明らか。学生に驚きの笑顔が広がった。

「人が手を加えなくても自然は自分の力で回復しようとしている。この事実から何かを感じてもらえれば」

震災からの自然の回復システムの解明に加え、被災地に大量にもたらされた津波堆積物（海砂）の有効利用も研究テーマの一つ。脱塩にエネルギーを使うより、海に戻すのがリーズナブル。現状では海洋への不法投棄にあたるため、環境基準をクリアするための分析データ蓄積に力を注ぐ。

里山や街路樹から樹木の〝生きざま〟を追う

新緑が目にすがすがしい5月の石巻キャンパス。

「枝が伸びて新しい葉が次々と出てくるこの時期、樹木はダイナミックに成長します。樹木はただ立っているだけではない。四季の移り変わりによって違った〝顔〟を見せるんです」と依田清胤（きよたね）教授（樹木生理生態学）。

芽吹き→新緑→深緑→紅葉→落葉→休眠……。依田研究室は、季節ごとに変化する樹木の「かたち」と、樹木の一生とのかかわりを調査しているんです」

その〝生きざま〟を調べるポイントは水。調査の対象としている落葉広葉樹のケヤキやコナラから採取した枝を0・02㍉の薄切りにし、顕微鏡でのぞくと水玉模様に見える道管が現れる。この道管を通して根から吸い上げられる水の量や速さの変化から、樹形がいかにできあがるのか、樹木が自らを取り巻くさまざまな環境要因とどのように関連して生きているのかを、丹念な野外調査とともに明らかにしていく。

カラッと晴れてソヨソヨと風が吹く日は、樹木の蒸散作用が活発になる。それは洗濯物が「よく乾く」状況と同

▶ ケヤキの枝が入った容器を手にする依田教授

「定点観測は欠かしません」。新緑の時期は、採取した枝を入れた容器で研究室のテーブルはいっぱいになる。

野外調査の場所は本学キャンパスの裏にたずむ里山「トヤケ森山」（173㍍）。周辺の街路樹も調査の対象になる。

「街路樹の一本を毎日観察するだけで、ものの見方が変わってくるはず」

研究室の学生に言う。〝宝物〟はすぐそばにある、と。

研究室の窓から望むトヤケ森山は、穏やかな陽光を浴び青々と輝いていた。新緑から深緑へ。確実に「山は動く」ことを見せているようだ。

現代芸術研究会　バンド活動は精力的に

現代芸術研究会は、音楽や絵画、写真、ダンスなど「芸術」を幅広くとらえて活動している。メインのバンド活動では、石鳳祭でのライブのほか、他大学との合同ライブを2カ月ごとに開催するなど、精力的にステージに立っている。

会員は約40人。「メンバー同士はニックネームで呼び合っています」と福泉竜平代表（理工3・宮城県泉松陵高）が話すように、会員同士のきずなは深い。大学から楽器を始める人も多いが、みんなで教え合い、技術を磨く。新しいことに挑戦したいメンバーがいれば、それをサポートする仲間がいる。「何か始めたい」という人にぴったりなサークルだ。

▲ 3月の合同ライブで

弓道部　心身の鍛錬に励み、成長

射法の基本動作を身につけ、物事に動じない「平常心」を養う弓道。キャンパス内に専用道場を持ち、日曜日を除くほぼ毎日稽古（けいこ）をしている。4月から夏まで毎月のように大会に出場、20人の部員は日ごろの稽古の成果を発揮する。4月の東北学生弓道大会では男子が「ベスト4」に。幸先の良いスタートとなった。一人で行う武道だが、お互いの長所・短所を確認し合うなど、「一人とのかかわり、は上達に欠かせません」と弓道部主将の石塚紘晃さん（理工3・山形県楯岡高）。

合宿は9月、山形県蔵王で。密度の高い稽古とともに心身の鍛錬に励む。メンバーは一回りも二回りも大きくなる。

▲ キャンパス内の弓道場で稽古

石鳳祭実行委員会　新しい試みに挑戦

本学学生のほか近隣の方々が多数来場し、キャンパスが最も盛り上がるイベントが大学祭「石鳳祭」だ。24回目となる今年は「驀進（ばくしん）」をテーマに、10月12日（土）、13日（日）の2日間にわたって開催される。

石鳳祭実行委員会は会員32人。メンバーはメーンステージの企画やゲストライブの立案・運営などにあたっている。「新しいことに挑戦したい」と小室遼介実行委員長（理工3・宮城県古川学園高）。「石鳳祭は少人数で時間をかけて丁寧に作っているお祭り。クオリティーでは他大学に劣らない自信があります。来てくれた人に楽しんでもらえるようなお祭りにします」と力強く語った。

▲ 昨年の様子

本学には体育会系、文化会系、特別団体の合わせて54のサークルがある。学内外で活躍する7団体の活動を紹介する。

サークル紹介

マーケットトレード研究愛好会　就活にも役立つ企業研究

マーケットトレード研究愛好会は、今年4月に始動したばかりのサークル。石川達也会長（経営3・宮城県富谷高）は「講義で金融商品取引法を学ぶうちにより詳しく企業経営の実態を見てみたいと思うようになり、友人と立ち上げました」と話す。

会の目標は「企業の研究」。「専門書を読むことから始め、経営分析などを学んでいきたい。各自が興味を持って取り組めるよう、バーチャル株取引に挑戦することも考えています」と積極的だ。「活動を通して企業や業界を見る目を養うことは、就職活動にも役立つと考えています。仲間とともに助け合いながら知識を深めていきたい」と話した。

▲ 研究に取り組む石川会長㊨

硬式野球部　東北地区選手権で飛躍を

南東北大学野球連盟で活躍している硬式野球部。春・秋季のリーグ戦優勝、全日本大学野球選手権大会出場が目標だ。部員は約70人。折笠洋平主将（経営4・福島県若松商業高）はチームの特徴として練習への真摯（しんし）な取り組みを挙げる。「全体練習だけでなく、自分で考え、工夫しながら自主練習に取り組んでいます。『自分次第で大きく成長できる』という意識の高さがチームの力につながっています」。今春はエース・笠原拓海さん（経営4・山形県新庄東高）ら投手陣を中心とした堅い守備で開幕7連勝したが、あと一歩及ばず2位に終わった。6月の東北地区大学選手権大会でさらなる飛躍を目指している。

▲ 好投するエースの笠原さん

カヌー部　初心者でも目指すは全日本

部室の近くを旧北上川が流れ、練習場所は目の前にある。部員は女子マネジャー7人を含め23人。全国制覇の実績を誇る宮城の強豪、中新田高校出身者もいるが、未経験者も多く部長の石川隼人さん（理工2・岩手県盛岡商業高）もその一人。高校時代はサッカー部で、レギュラーではなかったが全国大会出場の経験を持つ。

自慢の運動神経も水上では通用せず、感覚をつかむまで1カ月も。「できないまま終わるのは悔しい。初心者でも負けたくない」と、練習時間確保のため自宅（岩手県花巻市）から大学近くに引っ越した。挑むは関東学生選手権、全日本学生選手権、日本選手権だ。

▲ 旧北上川で練習

学生会　サークル活動の盛り上げ役

「各サークルが円滑に活動できるように支援することが私たち学生会の役割です」と渡辺和洋学生会長（理工3・福島県日本大学東北高）。執行部10人がサークル活動を盛り上げようと力を尽くしている。

学生のサークル離れが進むなか、学生とサークルの交流の機会を設けようと、4月には花見交流会を初めて開催した。

渡辺会長は「多くの学生が参加し、手応えを感じています。今後も機会を見て、このような交流イベントを実施したいと考えています。また、今後は団体間の交流を深めるようなイベントも企画していきたい」と、サークル活動のさらなる発展を目指している。

▲ 交流会を見守る渡辺会長